

建築の宝庫

外観の変遷

18世紀までの城は、ルネッサンス期の二つの居所、中世期の建物一つ、主塔の跡を擁していました。入り口に設けられた小城塞によって、中庭が完全に閉鎖されていました。壁で囲まれた庭園を合わせると、城の領土はアンドル川の中州全域を占めていました。また、農業用途の建物に取り囲まれる形で養禽場がありました。17世紀末期には、この建物に代わって二つの対称形を成す付属用途の建物が建てられました。前方には半月型の中庭と長い並木道が広がっています。

イギリス式庭園*

1825年以降、ビヤンクール侯爵によって草地部の排水が行われ、イギリス式の庭園*が整備されました。同心円状に配された並木道からは、城のファサードをゆつくりと鑑賞することができました。アンドル川の数々の支流に沿って、多くの木々が立ち茂り、自然がふんだんに残されています。なかには、アトラス杉、セコイア、アメリカ糸杉(毎年葉が生えかわることからはげ糸杉とよばれるもの)、アジアのイチョウといった、遠い異国からやって来た木々も植えられています。

水面を用いた鏡の効果

15世紀の大砲用塁道*が、城の下部でテラスを構成していました。1950年代の修復作業の際に、このテラスが取り除かれ、敷居で流れの弱められた川面に城が写り出すように整備されました。

用語集

イギリス式庭園：自然の景観を模倣した、自然美の趣のある庭園。
 カンデラープル：上向き方向の装飾モチーフで、垂直軸を中心としてオブジェや枝つき葉を配したもの。
 大砲用塁道：城のふもとに配されるテラスで、大砲の設置に使用された。
 張り間：垂直方向の2本のラインで挟まれたスペース。
 ピラスター：垂直方向のフラットな装飾で、柱を模し、柱と同様の働きを持つ。
 プット(複数形はブッティ)：小児、天使、キューピッドを同時に体現する小人物。
 ルネッサンス初期：フランスにおけるルネッサンスの初期で、15世紀末から1520年ごろまで。

役に立つ情報

見学に要する平均時間：1時間30分
 フランス語によるガイドつき見学あり
 フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語によるオーディオガイドあり
 身体の不自由な方向けの見学あり



国立モニュメントセンターは、フランスのモニュメントに関するガイドシリーズを翻訳版で出版しています。文化・歴史遺産バージョンは書店ブティックにて販売しています。

Centre des monuments nationaux
 Château d'Azay-le-Rideau
 37190 Azay-le-Rideau
 tél. 02 47 45 42 04
 fax 02 47 45 26 61

www.monuments-nationaux.fr

アゼ・ル・リドー城

ルネッサンス建築の傑作

社会的地位向上のあかし

1510年、アゼの領地および城塞がジル・ベルトロの手に渡り、イタリア趣味の美しい城となるべく再建されました。その豪華なたたずまいは、ベルトロが王の秘書官兼公証人に任命されることで貴族階級に昇進したことを反映しています。辣腕の財政家のベルトロは、フィリップ・レバイを妻に迎へ、親戚となる王国の財務長官サンブランセーの助力を得て、フランソワ一世の治下で華麗なキャリアを積んでいきます。しかし、サンブランセーが公職金横領の罪で処刑されると、ベルトロも失跡します。城はフランソワ一世に差し押さえられ、1537年に王の戦友であったアントワヌ・ラファンに譲渡されています。

新ルネッサンス



1820年ごろの城ラングリユメのリトグラフィ。

城は、18世紀までアントワヌ・ラファンの子孫によって所有されました。1791年に、シャルルド・ビヤンクール侯爵が領地を買取ります。貴族階級にあった侯爵とその子孫に手がけられた城は、かつての威光を取り戻し、ロマンチックな大庭園も造られました。19世紀末、最後の侯爵が破産状態にあったため、城の売却が余儀なくされました。1905年には、城と庭園の一部が国所有化されました。

*裏面に解説あり

中庭に面したファサード

ファサードには、規則正しく張り間*が並び、整然と配された窓によって、ルネッサンス初期の典型的なたたずまいを見せています。

各階のピラスター*が開口部を囲み、くり型をつけた水平方向の胴蛇腹と交わることによって、基盤の目状の装飾を構成しています。

屋根に取られた高い位置の天窓によって、城が空に向かってそびえ立つ印象を与えており、これは大階段の装飾によっても強調されています。

居所は水面脇に配され、建物の角に張り出した小塔がアクセントになっています。

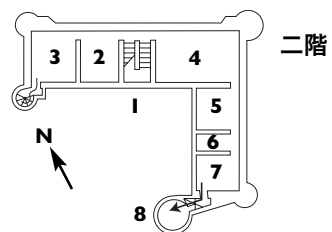
I 大階段

貴賓用の玄関でもある大階段は、建築当初、ファサードの中心軸上に位置していました。大階段は、3階まで各階にロジgiaを有し、上部には垂直性を強調する切妻壁が見られます。

ファサードにはふんだんに装飾が施され、ゴシック建築の伝統装飾である小さな建築物や天蓋つきのニッチと、ルネッサンス様式の唐草文のフリーズ、プット*、カンデラブル模様*、ひし形のピラスター*が併在しています。

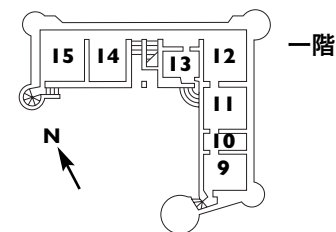
この大階段は、フランスにおける最初のストレートタイプの階段のうちのひとつであり、また、主要居所内に取り込まれています。中世期には、階段が隣接塔に配置されていました。

各階を結ぶ階段部には格間の天井が配され、楕円形の肖像が飾られています。



貴族の間

- 2 控えの間は、左手に通じています。
- 3 大寝室は、控えの間に続き、王の滞在に用いられていました。
1619年には、アゼの領主との面会に訪れたルイ13世が滞在しています。
- 4 大広間は階段の向こう側に配され、舞踏会や宴が催されていました。エレガントなコーニス装飾によって広いスペースが強調されています。大きな暖炉の柱とピラスター*には、ルネッサンス様式の彫刻装飾が見られます。マントルピースに施された火とかげ(フランソワ一世の印)と題銘つきの装飾図案は、コーニスの下部にあった枝葉装飾と同様に、20世紀半ばに完成予想図に沿っただまし絵で復元されています。
- 5 次の間はこれよりも狭く、くつろげるスペースになっています。これが中庭と庭園の間にある居所の最初の間にあたります。
- 6 小書斎は、16世紀に礼拝堂を設けるためのスペースであったと考えられています。
- 7 家主の寝室、この部屋の配置が、ジル・ベルトロの居所とされる決め手になったと思われます。窓からは中庭、庭園、川を一望に見渡せます。この部屋の窓は、大広間の窓と同様に、残されていた貴重なルネッサンスの木工細工品を用いて復元されました。下部には装飾透かし細工が見られます。
- 8 らせん階段は、ジル・ベルトロの居所へと通じていました。



一階

代々のド・ビヤンクール侯爵の手によって、一階部分がレセプションの場に整備されました。

- 9 書斎には暖炉が置かれ、壁には板張りが施され絵が掛けられています。
- 10 旧通路は、中庭と庭園の間に位置します。ビヤンクールによって、床部が持ち上げられ、空間が仕切られたことによって、アーチ天井を擁した快適な書斎になりました。
- 11 食堂には、ビヤンクールの紋章が刻まれたテーブル・食器セットが保存されています。
- 12 台所の床には高さがつけられています。ルネッサンス期の暖炉と流しが残され、天井には交差リブヴォールトを擁しています。次の部屋との間に井戸が置かれています。
- 13 食料品貯蔵室は、16世紀当時、食料品の保存と配分に用いられていました。
- 14 ビリヤードの間は18世紀のタピスリーで装飾されています。タピスリーの産地であるボーヴェでつくられた作品で、狩りの場面が描かれています。
- 15 ビヤンクールのサロンには、絵画、歴代肖像画、侯爵夫妻の写真など豊富なコレクションが飾られ、19世紀当時の暖かい雰囲気が再現されています。